

2020 年度 大谷大学文藝コンテスト総評

今回はエッセイ部門に 605 篇、小説部門に 239 篇の応募があった。新型コロナウイルス禍の現在、私たちはなるべく自宅で、なるべく口を閉ざして、静かに過ごすことを要請されている。だから大幅に増えたひとりの時間を活用して原稿執筆に挑戦しようとする高校生も多いだろう。と、ある程度は予測していたものの、これほど応募作が急増するとは思っていなかった。小説の応募数 239 は過去最多である。エッセイも昨年度より 100 篇以上増えた。

もちろん、質的向上を伴わない単なる量の変化では諸手を挙げて歓迎というわけにはいかない。だが今回は、特に小説部門の作品に多種多様な工夫が認められた。一篇ずつ読み進めながら、新鮮な世界に分け入っていく楽しさを繰り返し味わうことができた。もっとも、最終審査は紛糾に紛糾を重ねるような事態となった。どういう要素に最も重点を置くか、という点で審査員の見解が分かれたからである。物語の面白さ。人物造形の的確さ。語り・文体・会話の妙味。発想・着眼点の独創性。修辞力・描写力の卓抜さ。主題の深遠さ・切実さ。小説の価値を決定づける要素はいろいろあるが、それらに優先順位をつけるとしたらどうなるか。審査員によってこの順位のつけ方がかなり食い違ってしまったのである。

さらに物語の展開と主人公の変容だけを抽出しても、それらがきちんと因果関係を形成するように明確に組み立てられている作品(必ずしも因果応報や勧善懲悪とは限らないが)もあれば、それらが通常の因果関係から逸脱して線路のない斜面を迷走しはじめる作品もある。私個人の嗜好で判断することが許されるならば、揺曳する無意識や自律するイメージを掬い上げようとする、後者の不条理な世界を高く買いたい。しかし、演劇でウェルメイドと称されるような、前者の明快で安定した世界をよしとする人もむろん少なくない。同一の特質を、一方は評価し、他方は否定することになる。このような判断の対立は小説観の相違に根差すものだけに双方とも容易に持論を引っ込めることができず、妥協点を探る作業は難航を極めた。

いま二者の対立のように述べた事柄は、実は二者の対立ではない。理解してもらいやすいように便宜的にそういう形としたままで、実際は三者にも四者にも作品の評価基準は分かれた。先に触れた「多種多様な工夫」にしても、そのうちのどれを最も重視するかという点で審査員の意見はなかなか一致を見なかった。紛糾に紛糾を重ねたというのは、問題点

がこのように重なり合いしかも相互に関連していたため、それらを一つひとつ切り取って単独で論議の対象とすること自体が至難だったということなのである。では、紛糾を重ねた結果どうなったか。それは掲載作品を御覧いただくほかはない。ただ、受賞作が一つの文学観に集中することは極力避けるように努めたつもりである。エッセイ部門においても、この方針に変わりはない。文学の豊饒さはその多様性によってこそ保証されるという文学観は、審査員皆が一致して抱くものであり、これは今後も変わらないはずである。

以下、小説部門の応募作品を通覧して気づいたことを述べたいと思う。

今回は複数の視点から構成されている作品に幾度も出会った。複数視点の導入は複数の主体の設定を必要とするから、自分に近い主人公を設定してその人物と二人三脚で進むような展開は不可能である。多くの書き手にとってこれはチャレンジングな選択だったと思われる。もちろん、人物や出来事を複数の視線にさらすことで作品内の真実を相対化し、物語を錯綜させるこの方法は、自然発生的な安定感を犠牲にする代償として文学的表現ならではの立体感や感触を生み出すことができる。その意味では真っ当な創作意識の実践でもある。当然ながらこの方法による小説には綿密なプロットに基づく虚構性の高い作品が多く、読み終わったとき濃密で耽美的な悪夢から目覚めたような気がしたほど印象深いものもあった。

ただし、複数の人物が語り手となる作品では、ときに残念な思いに駆られたことも書き添えなくてはならない。語り手の役割は物語の展開を司るだけではない。語り手が語ることで作品内には時間と空間と気配が生まれ、語ることで語り手は自らの人格・知性・境遇などを作品内に滲ませていく。けれども語り手のそういう特性が十分に発揮されていない作品が目についた。具体的には語り手の語り口や敬語の使い方が不用意・不適切であったり、語り手の生活感覚とその来歴とのあいだに齟齬があったりして、語り手が一個の存在として成立しにくくなっている作品や、物語を語り継ぐことのみを目的として複数の語り手が交替に登場するような作品があった。先に述べたように、語り手の交替自体は大きな可能性を有する小説の方法であって、その採用はむしろ望ましいことである。だが複数の語り手たちが、一直線上に並んで補完関係に終始するのではつまらない。たとえば語り手が交替することで物語に亀裂や矛盾が生じるように仕立てたい。そうすれば、作品内には途端に緊迫感が漂い、隠された真実を追求するというベクトルを担う物語は、読者の吸引力を一気に増大させるのではないだろうか。

一方、物語の型として今回散見されたのは、心身の辛さを我慢して学校や会社に通って

いる人物が精霊（のような存在）によって救われる、というもの。誰かに救ってもらいたい人がこんなに大勢いるのか、と溜め息が出たくらい、この物語の型は多かった。救済が組織への復帰や適合ばかりでなく、この世からの離脱（つまり死）である例も多かったのも、若い世代の日常的な痛み・苦しみに思いを馳せずにはいられなかった。しかし残念ながら、独立した文学作品としては、人間の生死に関わる奥深い位相には届いていないものが多いように見受けられた。人間は誰でも様々な苦しみや哀しみを抱えて生きているものだし、救世主はそう簡単にはあらわれないから尊いのだ。自己を仮託した主人公を早く美しく救済したい気持ちは理解できるが、その気持ちの直接的な投影だけでは小説は成立しない。主人公はもっと苦しまなければ人間になれない。

この型の物語に限らず、涙の頻出にも辟易した。人間は誰でも苦しみや哀しみを抱えているが、それでも泣かずに生きている。頑張っている。創作の世界でなければ思い切り泣くことができない、という人もいるだろうが、優れた小説を書こうと思うのなら、物語の中でもやはり安直な涙は禁物と心得たい。顔で笑って心で泣いて、といえば演歌の一節のようなが、少なくともその程度の複雑さを体現した存在を登場させなくては、物語の平板化・形骸化は免れがたい。

最後にエッセイについて一言。題目（タイトル）が問題である。単なる説明に堕しているものが多い。小説部門には工夫を凝らした題目が多かっただけに（成否はともかく）、付け足しの補足説明みたいなエッセイの題目には興醒めだった。題目も作品の一部である。審査対象である。

なお、今回は応募数が増加したこともあり、募集規定に従わない原稿が目についた。規定違反の作品は審査の際不利になる場合があるので、応募者は十分注意してほしい。特に以下の字数規定である。小説部門は 8,000 字（20 枚）以内、エッセイ部門は 2,000 字（5 枚）以内。400 字詰めの規定の応募用紙を使つての 20 枚以内、5 枚以内である。